

「遊」に込めた思い

中村 生命とは、平和とは、というように名詞で問いを立てても答が出てきません。生命尊重と言ったらそこで思考停止です。悩んだ結果、動詞にすればよいと気づいて。季刊生命誌では、毎年一つずつ動詞を拾いながら考え続けています。

松岡 よくやられているなと思って感心していたんですよ。

中村 今年は、「遊ぶ」にしました。東日本大震災でたくさん抱えている中ですが、あえて「遊ぶ」としたのです。今、与えられている課題は、人間・自然・機械（人工）の関係の見直しですね。これまでは機械論的自然観を基本に動いてきましたが、これからは松岡さんのおっしゃる編集的、私の言葉では生

多義性を

かかえた場を遊ぶ

松岡正剛×中村桂子

松岡正剛（まつおか・せいごう）

1944年京都生まれ。早稲田大学文学部卒業。東京大学客員教授、帝塚山学院大学教授を経て、現在、編集工学研究所所長、インス編集学校校長。1971年に工作舎を設立、オブジェマガジン『遊』を創刊し、分野を超えた編集を実践。多方面の研究成果を情報文化技術に応用する「編集工学」を確立。日本文化研究の第一人者でもある。著書に『知の編集工学』『遊学』『フラジャイル』『日本という方法』『松岡正剛千夜千冊』（全7巻）『わたしが情報について語るなら』ほか多数。



命誌的世界に変えていくことだと思っております。生きものは白か黒かで割り切れないところに本質がある。つまり遊びがあるというところを考えたくて。昨年は「編む」でした。編む、遊ぶ、と来ましたので、これまで伺いたいことがたくさんありながら、少し敬して遠ざけていた松岡さんにここで伺わなければと思って。松岡さんの最初のお仕事は雑誌「遊」の編集ですね。それを始めになった経緯をお聞かせ下さい。

松岡 私は京都の出身で実家は呉服屋さんです。そこでは例えば、そろそろ桜の季節たけなわとなれば、お客さんへのお菓子、お茶の銘、母親の帯、それから床の掛け軸や庭の花、おからやお豆腐：そういうものしつらえやお店で交わす言葉がすべてつながりながら一斉に変わっていく、どこも切れないんですよ。分節されながらつながっている。そういうものに囲まれて育った自分が東京へ来てみると、見事に断絶している。一九六〇年代後半に早稲田の仏文で大学時代を送りましたが、どの授業に出ても科目をまっとうしようとしていて、学問も社会も連続性がない。今でいう縦割りだということを強く感じていたんですね。

中村 京都ほどの伝統はありませんけれど、東京も以前はそれなりに季節と共にうつろう暮らしを感じさせるものの中にあつたのですが、経済成長と共にそれを急速に失ってしまいました。

松岡 その頃、知り合いで記憶を失った少女の面倒をみることになり、脳や生命について考え始めたところ、単一の学問は一人の少女の記憶を語れないことに気づきました。母親が大事なことに気づいたので。そこで考え方を変えようとしていた頃、民俗学、とくに折口信夫^{註1}と柳田国男^{註2}を読むようになり常民と遊民というものに出会ったのです。

註1：折口信夫 [おりぐち・しのぶ] (1887-1953)
国文学者・歌人。大阪生まれ。民俗学を国文学に導入して新境地を拓く。歌人としては釈道空の名で知られた。主著に『古代研究』、歌集『春のことぶれ』など。

註2：柳田国男 [やなぎだ・くにお] (1875-1962)
民俗学者。兵庫県生まれ。民俗学研究を主導。主著に『遠野物語』『蝸牛考』など多数。

定住する者とそれをまたいでいく者とで、文化や生活や価値観が異なっていて、その両方を見ないと世界については語れないんじゃないか。

常民の研究はすでにあるから、僕は遊民の側から常民を見たり、遊民同士を見たいと思い、だんだん「遊」という言葉への関心が強くなったのです。遊星、遊園地、遊戯、遊撃：つまり正規性ではないものに「遊」という字を使うんですね。「遊」というイレギュラーが一方にあることによってイレギュラーも成立している。大きな雑誌や出版物はレギュラー、お金もなかった僕はイレギュラーなほうからものを見ようと考えた。

中村 それはすばらしい。学問はイレギュラーを外しますからね。でも日本の文化は、芭蕉も旅ですし、動くもの、外れるものの中に大事なものがありませんか。昔、留学でなく遊学って言いませんでしたか。

松岡 大学は正規性なんです。どこかの大学から正式に外国へ行った人は留学で、だれかに面倒をみてもらったり、自費で行っているのは遊学と呼んで差別していません。本当は遊学のほうが大事ですよ。

僕らは、世の中にある定義に当てはまらないあまい領域や、揺れ動いためらいを抱えていかななくてはならない。これは湯川秀樹さん^{註3}に私淑していた頃に辿り着いた考えです。素粒子にはアイデンティティ(自己同一性)がない。ある素粒子がそれであるかどうかは確率的で全体が確率振幅の中にあるということが最初はよくわからなかったのですが。

ある時、お風呂場で転び家に居られた湯川さんにロングインタビューをさせていただいたのです。その頃、素領域ということをお考えになっていて、素粒子の奥にハンケチがたたまるぐらいの小さなトポスがあって、それは宿屋やおっしゃるんです。「素粒子は宿屋に泊まっていた帰るんや。百代の過客が素粒子で、大事なのは宿屋のほうや。」という話に非常に関

註3：湯川秀樹 [ゆかわ・ひでき] (1946-2010)
理論物理学者。東京生まれ。中間子の存在を予言し、1949年ノーベル物理学賞受賞。